

# 名作の舞台を訪ねて

定年後の自分の夢は、少年時代また青春時代に読んだ世界の名作の舞台を訪ね歩くことでした。

2002年から3年にスペインのマラガ大学に留学していたときには、グループのバスで「ドン・キホーテ」の舞台ラ・マンチャを訪れることができました。

取り急ぎの以下のレポートは、大学での研究発表と2泊3日でラ・マンチャを訪ねた際のレポートです。

本年（2005年）秋には、友人のカメラマンと一緒に、次のような企画で、再度、ドン・キホーテの足跡を訪ねてみたいと思っています。アドバイス等ありましたら是非お願いします。

タイトル 「見果てぬ夢」は風まかせ

サブタイトル --Look look! Photos & essays--

名作の舞台を訪ねて 『ドン・キホーテ』生誕400年、“東京のドン・キホーテ”定年退職したサンチョ・パンサ（写真家）とラ・マンチャ道中膝栗毛（・・・でもないが、時にはロシナンテならぬバスや車に乗って・・・）

さらに今後、時間と健康とお金の課題をクリアーできれば：

アトランタ（風と共に去りぬ）

プリンス・エドワード島（赤毛のアン）

ロシア（戦争と平和）

中国大陸（三国志）

などを訪ねるのが夢なのですが、あまりにも**ドン・キホーテ**的過ぎますか！？

## ラ・マンチャ（スペイン）

“我がドン・キホーテ”を語る

マラガ大学の「スペイン文学」のクラスでは、セルバンテスのドン・キホーテについても取り上げられた。担当教師のテレサは前日、私に声をかけてきた。

「タケシ、確かあなたはドン・キホーテに詳しいって言っていたわね。明日の授業でできる範囲でいいから研究発表をしてくれない？」

むろん、スペイン語による発表である。家に帰ると、私は急ぎょ、辞書を引き引き、自分なりの経験や知っていることをまとめた。

### なぜ、私がドン・キホーテなのか？

それは、小学校の6年生までさかのぼる。学校の学芸会に、クラスで「ドン・キホーテ」の劇をすることになり、私がサンチョ・パンサの役を演じたのがきっかけだった。

以来、その奇想天外なストーリーに惹かれて、少年向けの本を、大人になってからは全訳本を通読したものだ。また10年ほど前、職場の近くにある日本スペイン協会で、週1回、夜、原書による勉強会があったとき、なんとか時間をやり繰りして出席した。さらに、松本幸四郎がドン・キホーテを演ずるミュージカル「ラ・マンチャの男」も東京で3回観劇した。かなりの凝り性だったともいえる。

ドン・キホーテもだが、サンチョ・パンサの言葉もいい。

「人間寝てるうちは、身分の高え者も低い者も、貧乏人も金持ちもみんな同じでさ」(永田寛定訳)

「この世を捨て、地の下へもぐる段になったら、お大名も日雇もおなじように窮屈な途を歩くだし、法王様のからだも聖器番のからだも、よしんば背たけにちがいはあろうと、占める広さに変わりはない」(同訳)



.....

二人の間でやり取りされる諺は、実に示唆にも富んでいる。正義を求め、悪と戦うために槍をかかえ風車に突進するドン・キホーテは理想主義の典型であり、その従者サンチョ・パンサは物質主義の権化ともいえる。セルバンテスは58歳のとき前編を、68歳のときに後編を出版した。亡くなったのは奇しくもシェイクスピアと同じ1616年だった。

作品は近代西洋文学の原点ともなり、聖書について世界で多くの言語に翻訳されているという。物語はわかりやすく面白い。しかしながら、それをどの程度深く理解できるかは、読者の成熟の度合いにかかっているのではないかと。何回か本に目を通した自分自身の体験からして、そう言えると思う。

発表を終えると、クラス仲間からは拍手が起こった。「トーキョーのドン・キホーテ、いいじゃない!」。私は、これまでに勉強し積み重ねてきたものを、若干でも発表できたうれしさに、心の中ではやや興奮していた。テレサは私の話を総括しながら、更にさまざまな深い解説を加えていった。



マラガ大学の修了証書



スペイン料理「パエジャ」



ひまわりの続く大地



### 各地を訪ねて

留学では、クラスでの勉強のみならず、居住する町での人々との触れ合いや交流、また各地を訪ねることも学生生活をより充実させ、その幅も広げてくれる。学んでいる外国語の生きた実践の場ともなる。以下は、私が訪ねた各地で見、感じ、遭遇したエピソードの一端である。(ラ・マンチャ地方以外は「飛行機に乗ったドン・キホーテ」をご覧ください)

### ラ・マンチャ地方

私もまた「ドン・キホーテ」の如くに・・・

ラ・マンチャ県のさる村、名は思いだしたくない村に、さほど前のことでもなく、槍かきに槍、古びた楯、ひよろひよろ馬にはしっこい狩犬をそろえた、型のごとき郷土が住んでいた。昼は羊肉よりも牛の勝った煮込み、たいていの晩は昼の残り肉へ玉ねぎなど刻みこんだサラダ、土曜日に塩豚の玉子あえ、金曜日にレンズ豆、日曜だと小鳩の一皿くらいそえて、それだけに収入の4分の3が消えた (セルバンテス作「ドン・キホーテ」 永田寛定訳 以下の引用も同じ)



どこまでも続くラ・マンチャの大平原

小説「ドン・キホーテ」の書き出しである。「正編」「続編」とあるこの長編小説では、すぐに一つの見せ場が登場する。

この時、あの大野には今もある粉挽場（こなひきば）の風車が 3、40 あらわれた。ドン・キホーテは、それに目をとめるやいなや、従士に言った。

「天はわたちの仕事、願ってもみられないほど上首尾に、運んでくださるぞ。それ、あそこをみなさい、サンチョ・パンサ。山のごとき巨人が30びき、いや、もちっとじゃろうな、立ち現れたではないか。かれらと一戦におよび、みなごろしにしてくれよう。そしてな、まずえた分捕物で、富貴の道を開こう。これは名のあるいくさじゃし、かゝる悪種族を地のおもてから刈り取るには、神へのりっぱな御奉公じゃ。」

「巨人がどこに」と、サンチョ・パンサがきいた。

「それ、あそこに見える長い腕のやつらじゃ」と、主人が答えた。

「中には、腕の長さ2里に達するのさえ珍しくないぞ。」

「おめえ様、待ってくんせえ」と、サンチョ。

「あそこにめえるは巨人でねえ。粉挽場の風車ですがすよ。腕とめえるのがね、それ、風でまわって石臼を動かす、翅木（はねぎ）だあよ。」

.....



今もいくつかの風車が並び、野っぱらどころがっていった

小説「ドン・キホーテ」のストーリーの中で、あまりにも有名なシーンである。本の内容全部を知らない人でも、これだけは知っている。

ラ・マンチャの大平原。数ある風車を悪の象徴の巨人と見たてた。ドン・キホーテはサンチョ・パンサの止めるのも聞かず、乗っているロシナンテに拍車をくれた。思い姫ドゥルシネアを一心に祈念しながら、一番手前の風車に槍をかけた突いてかかった。

槍先が翅木にふれるよと見えた時、にわかに吹き起こった風が恐ろしい勢いで翅木を回転させたから、槍はぶち折れるし、馬と旗手（のりて）はそっくりさらわれて、後方へぼんと棄てられ、さんざんな態たらくで、

ブドウ畑の広がる広大な赤土の大地。バスで遠方から見えていた風車の群に近づくと何台もの観光バス、自家用車が草原の駐車場に並んでいる。風車の一つは見学用として、中まで入り、翅木の付け根まで上り、風から得た力が挽き臼につながる様子を見られるよう

になっている。今は、風は吹いても翹木は動かないようになっているが、いかにもどこかから、ドン・キホーテとサンチョ・パンサが出てきそうな情景ではある。

近くの町には、ドン・キホーテが騎士の称号を得るのに泊まった旅籠（はたご）、思い姫ドゥルシネアの住んでいたエル・トボソの家、さらに「ドン・キホーテ」の資料館がある。資料館は、町長が町おこし的手段として各国から翻訳書を集めた。さまざまな種類の言語の「ドン・キホーテ」が並んでいる。なんとといっても、この小説は聖書について世界で最も多くの言語に翻訳されているという。日本からのものは明治時代の翻訳ものが置いてあった。大勢の訳者がいるが、とてもすべては置ききれないのであろう。

（2005年は「ドン・キホーテ」生誕400年となった　1605年1月16日に「正編」の初版1200部がマドリードで刊行された）